





大

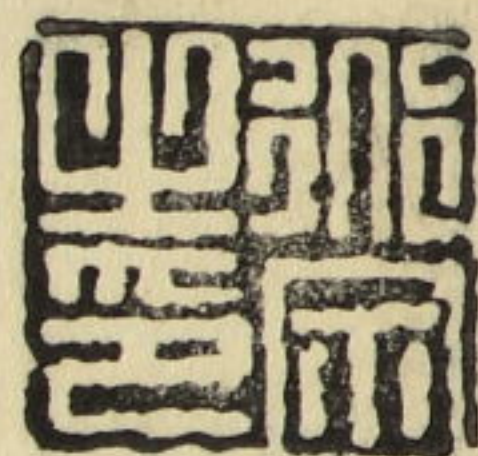
大

漢英文庫



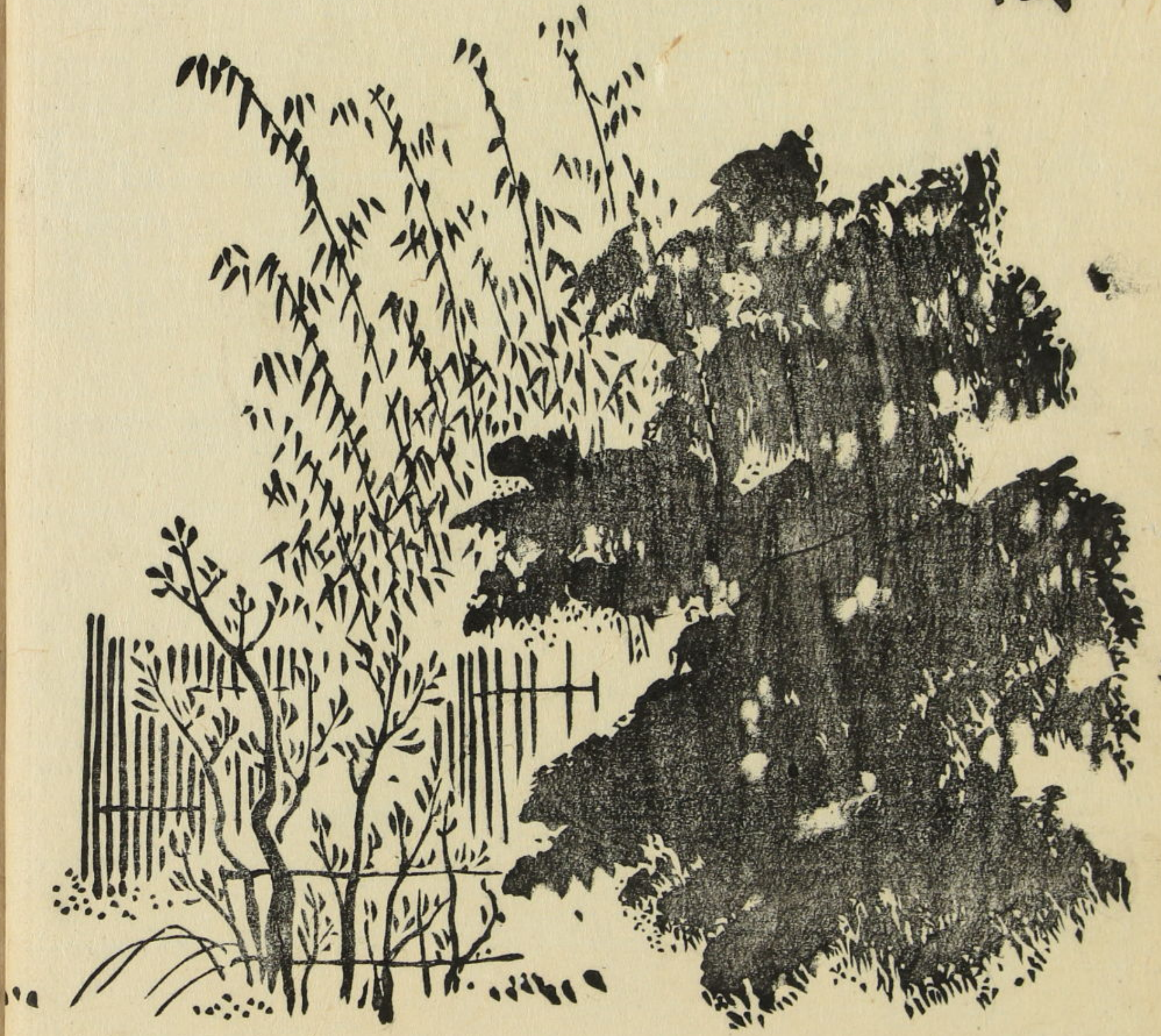
社

南岳悅山書





沙水園



子持式

- ・ 清岩は物敷奇一様不茶飯登一ツ
- ・ 於夕事しきみ也
- ・ 海々ぬきせれ客も出登りし
- ・ 月沢十二日并之八と舎日柴門は
- ・ 川もききき也 但し米系ハ撥ちらちの
- ・ ちいさき門より家内の写子の幾の
- ・ 五人階のといひ八月限う笑物と上



建門録子紀一と毎上之対の  
満座尤正客の所及發句短冊より徳  
山田日夕持る余のついでに  
一とていふ堂ハ多とて寄をの絶えに  
いとも方一間のり外ひろげりまゝに  
取巻に方丈を長明の糟粕を  
也

庵寄

ふ笑唐口戌去

自在菴  
七

上元甲子のと一いかに  
情少といて母叔障ありてあけし事の  
挿とハるさるる一とこの其始て  
かぬととけり

自在菴主

祇徳

元日也  
えり也  
世よなるこ板

菴の謬執 福菓の集 芳徳

菊人改

あきしうよ山も産け衣着て 圓十



甲戌春帖

自在菴門人 佛梵薩 撰

菴室行事

笠着くまのい 毎日

月次 毎月十二日

別會 毎月三八

祇室忌 卯月廿三日

たせ成忌 十月十二日

貞徳忌 十一月十五日

一白言なり  
古例のり城に

点とるに

○探頭。言捨

點用は後中文通等只今とて通  
祇貞方を法沙屋に掃出のり唐壽  
草庵に毎日通路仕仕

禁奢

分員に〜打り  
あ禮也今朝乃美  
推れ〜川甲城  
先ッきよのむ 店  
二三人のり 茶  
攝會起友み〜

祇徳

竹堂

祇阜改

徳雅





連歌廿賦物

分題

山

初鹿より野の音よ清なりとら

祇因

せくくぬるむ水滴乃口

祇徳

夏さき二魚も遠く春の来て

風徳

路

浅みとり奥荷行也るの鈴

雪牛

野芝もやき出る梅の口

祇貞

百姓乃小息子ハ心とゆすく

祇蓮

本

昔かゝぬ深山と姥一今朝の美

祇門

大ふくいこよ令如姥口

船歩

十徳の仕付草跡於蘆うり

來徳

船

候居く楫も体むや雲の川

松滴庵

露紅

梅ハ多うううの山口

祇徳

面白く勢の中子月燈て

波道

人

浦の名もい何のあさや波の美

大椿

子代乃撲ち床の獅子口

完二

二三月以のき地をけすり

祇尹



芭蕉翁三箇附方題

走

目はまゝに地を走らむ 寶舟

執翳乃役よまゝむらさきに

二ととの右近左近よ東風吹く

郷音

正月の代よ郷音くや和歌の妻

忍月一乃紐を念ふ梅くえ

彌麻くふ日飾も心川う山の端り

水光

祇徳

宗成

徳丸

祇貞

宗吟

馨

初咲の名も馨（と）や花の兒

奥れ一同よいぬあくる人

依保姫を依保の山辺よすみせり

徳和

祇徳

向意

切字

七の

や

法抄かゝ宛の遠ひあり  
畢竟やノ字の並不白化よ  
たりて松くの名目出たり

口合れや

又やあおけえ日れ山うつ

年玉扇く名乗一くり

多の松よ啾く宿竹耐をい

呂隠

祇晁

君山



切しや

初鶉や物子續きぬまの声

沙林 續く山乃きけ

落の蔓草物やのこひよて

捨や

死るぬ甲斐えゆる今世のまじや

福壽草ともえ日草とも

雪ハ郭公を啼きしめて

疑のや

え日の花や苔れわしひ鳥

代しのるあしよ音く四抽笛

交里も風の光もあしきり

居燕

祇徳

魚光

素徳

完二

來徳

祇圓

祇文

祇立

中のや

芝浦の雪や露子日けし先

候玉るくもあ候の杵

百千鳥あつ字ともくませく

鳩のや

まじ川や一二の雛の声こく

雑煮のむれ 雑煮 かく

人の口あしきまじきりよ

角のや

目字度やとまじきりあけぬ初鶉

心とも静よ省のおさくま

梅よま先一あしきり柳もく

祇仙

桃鏡

祇歡

祇庸

祇哲

祇朴

百梅

魚光

宗古



縷の也

朽ぬ芽れさ糸一や松の糸みとま

祇莊

栴うえまき柳 皆うゝひまの

祇徳

刺の鼻ハ社目よわくれ多きなり

得二

この糸よまきまきおきておとすや

たさみや こよまきや このや

名所のやのや 題略す

五字切

幾子代と誰を尺何らんねみま

自在庵

玄妙切

人車一梅や一ふ一咲ぬらん

栴月

三辰切

ねハ新休ハ鳳凰 借海老

祇蕉

をまり

梅了知る山修もあるを初曆

祇長

下知

蛙 聞ケるちの啼 虫もまの穴

又北房

六義分題

風 そつゝ

をのつゝう 雪の名也 四社乃神

尤右庵

賦 うそん

芥菘さあゝそ 鈴葉まゆせん

丈可

比 るそん

喰つゝやまのこの中ね 磯洲松

大可



真 ぬくも

松風の吹ひききもや門のま

三千女

雅 せいこころ

花もれきくぬくもや今朝のま

水路

頌 いたひい

民のそや秋子宿うんはあは美

之適

孟春

雪の声 不目えやぬの春

容峨

東風のそよ吹こんてまもやぬのま

古葉

凍解て竈のふつるまもさう那

和晴

初鶉のまゆいさうりぬかまもか

隠士 蕨鉄

礼てるーぬくもまもさう那

無徳

附方



八躰分題



其人

祇英改

附文の上座ハ笛と松と也ー

涼葉

重報屨乃ハまもさう那

祇徳

正二月とやうくまもさう那

祇道

其場

え朝やその場をさうぬ礼也ー

梵薩

天相

きんくも 鶉啼なり朝うすみ

宗古



時節

泡多や廓の仲とる後乃

雨朝

時宣

言や言の僧乃口とあく

山鶴

付

手形也又よきつるく芝の浦

祇月

時分

親と子の和しく勝也雑煮付

竹人

観ね

門の松百とひ潜れまもなり

佛因

五箇

自在菴附方  
人時天心所

人

人毎に老をいさむとて玉の春

祇元

仁者ハ山とてこのむ言

立德

和く咲垣ぬの香を侍候

祇徳

時

喜也梅付の香をひらきり

祇道

義をらんく勇む門の方嚴

水室

百ちとり法華の通王心り

祇徳

天

天下皆お明一言塔やぬの真

祇欽

礼者子松乃辛あつた

祇徳

のしうめ白和子風を和せて

祇風



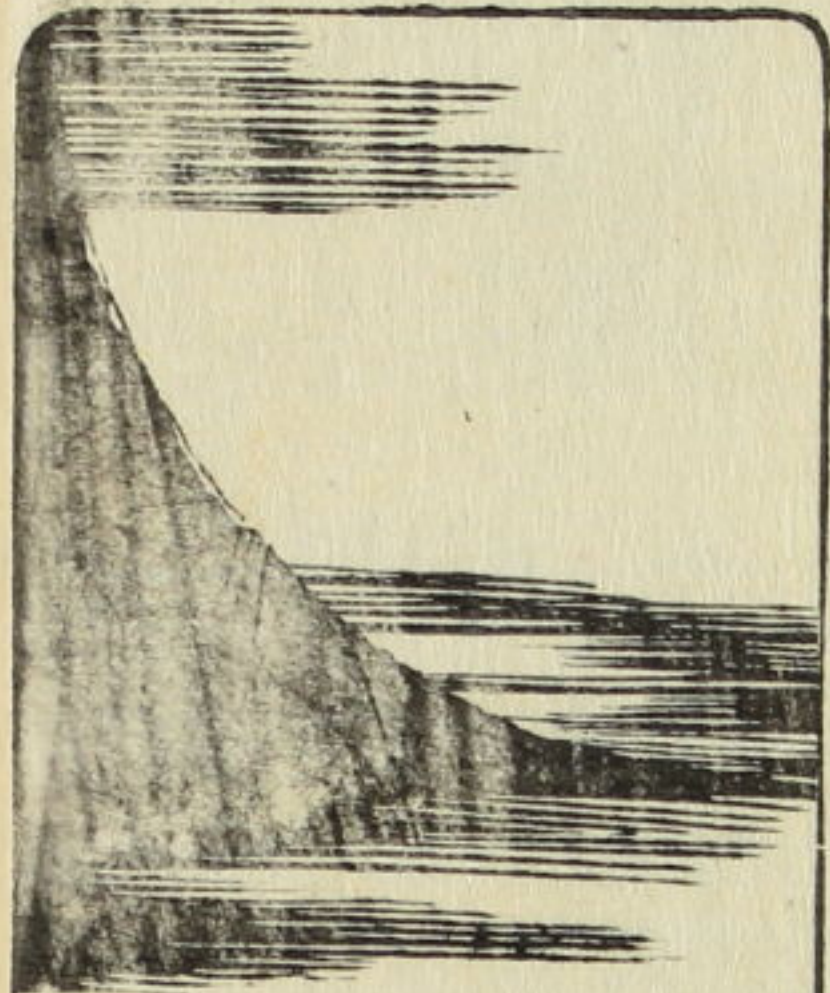
心

初志は豹の皮也人たるは  
智恵の輪取子勝る由は  
朝の書綴し柳に糸を  
所

祇笠  
祇徳  
冬扇

松竹の新定免く集立ぬ  
信ハ去用子叶ハ 年玉  
下胃 省乃ハと子ヤ 待ぬん

得二  
福來  
祇徳



志

え日れ盛見まもや日れから  
時も多うくも福來草咲  
雪ハ貴川ハ朝の各出つく

自在庵  
波道  
祇尹

行

かきしつ子松もすつ一里鶴の真  
乳や吞ら子も難煮すつり  
水より先よ心れぬるも来て

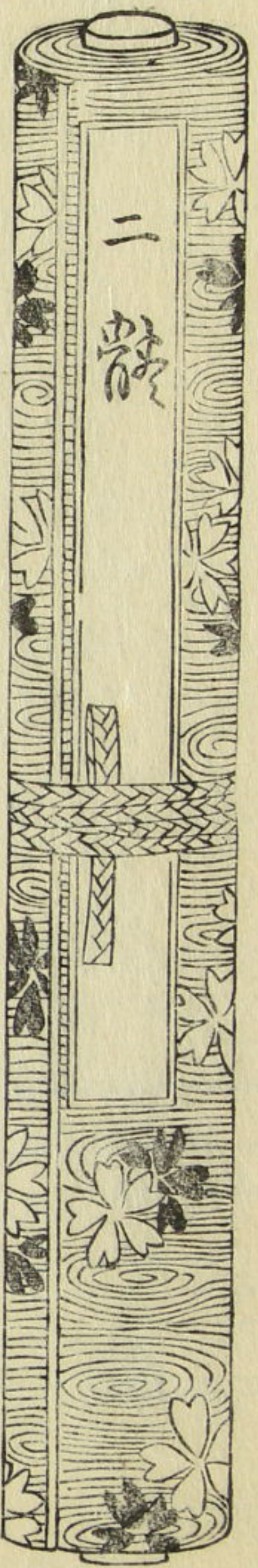
祇尹  
祇徳  
波道

草

よふ書と出るうしつ子初日か  
う川むけく並向よと玉  
清らく葉を別くき棧して

波道  
祇尹  
祇徳





心く汎諧

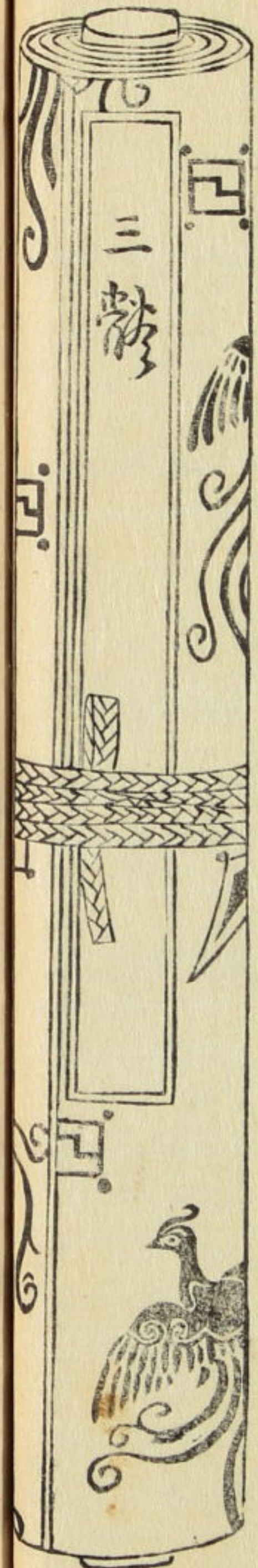
心眼をひらきくひてや花の春  
歩のくく一魚のわれ空  
醜くも中よ列子乃風吹く

竹堂  
徳丸  
自在庵

詞く汎諧

人毎くあそむを借連松の春  
梅の目さく一の静なれ宿  
五斗米の糶をもたうま蝶舞く

祇負  
徳和  
自在庵



幽玄體

曙を人よも又せまや玉乃春  
菊よ山辺乃機嫌くくく  
愚智くく柳ハ風よ吹き飛く

徳雅  
自在庵  
百梅

見様體

越く其山辺一初うはく  
鬘れれくくや元日乃旅  
深衣の糸よ雪の声流く

祇達  
自在庵  
祇庵

拉鬼體

魁の餘ハみま汎一花の元  
初日のおれぬ星れ照  
声ひくくあちくく雪の吹く

祇獨  
自在庵  
佛因



起

出る日もしもゆくまは起りか

了徳

美

まをせよ美くくは湖の梅

水卿

精

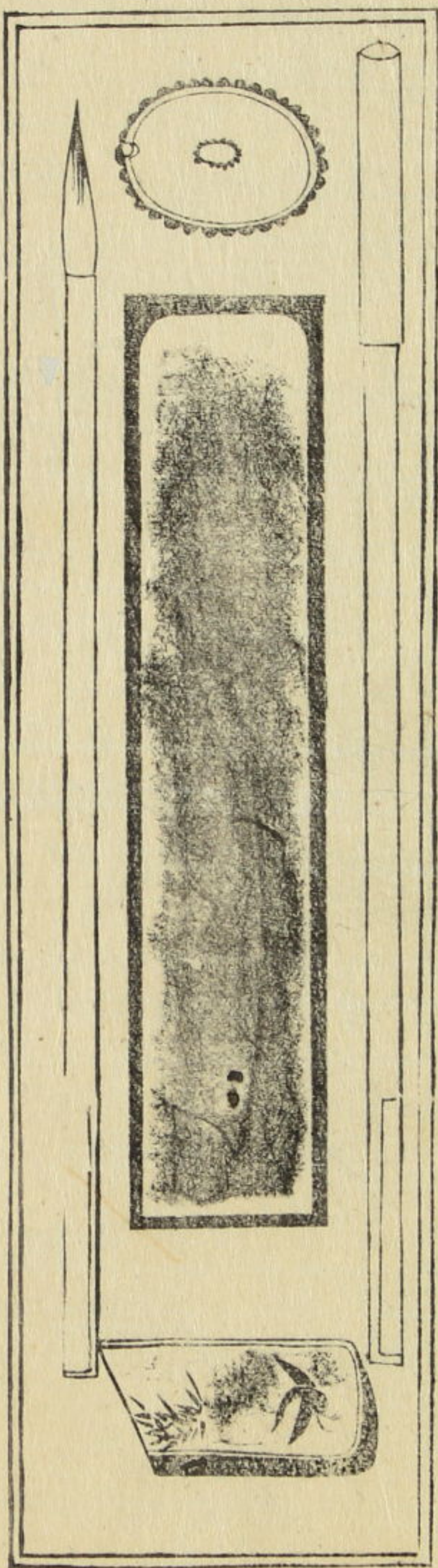
幸よ精すり名有り筆始

竹如

合

蓬蒿也岩子池田わん合

祇芳



いこく一画の格字

あまり中よ元日法一硯多

立德

さくく了地并く江南の梅

自在庵

夢ハ先ッ詩経より言出しく

お解く

こ一画の國字

書初也賞は一市れ寶筆

水室

滑楮ニ照らす欄干は梅

自在庵

る刀小鯢蜺版蝟乃とれもまて

お解く

濁くよむ格字

紅入水箔も法きせ一赤良の真

冬扇

初日よ古記後園乃梅

自在庵

猫もくま忘するよよ言別く

お解く



丸 いっ小

門のねみぬもろこしにまふいりよ

信夕

あううう勝乾蓬萊の梅

自在庵

もみさふ宮の形もろこし宮のまろ

おろく

右 ときさき

家父の旧号を用ひ

半秋改

餘月ある月のかいらや日の既

余月

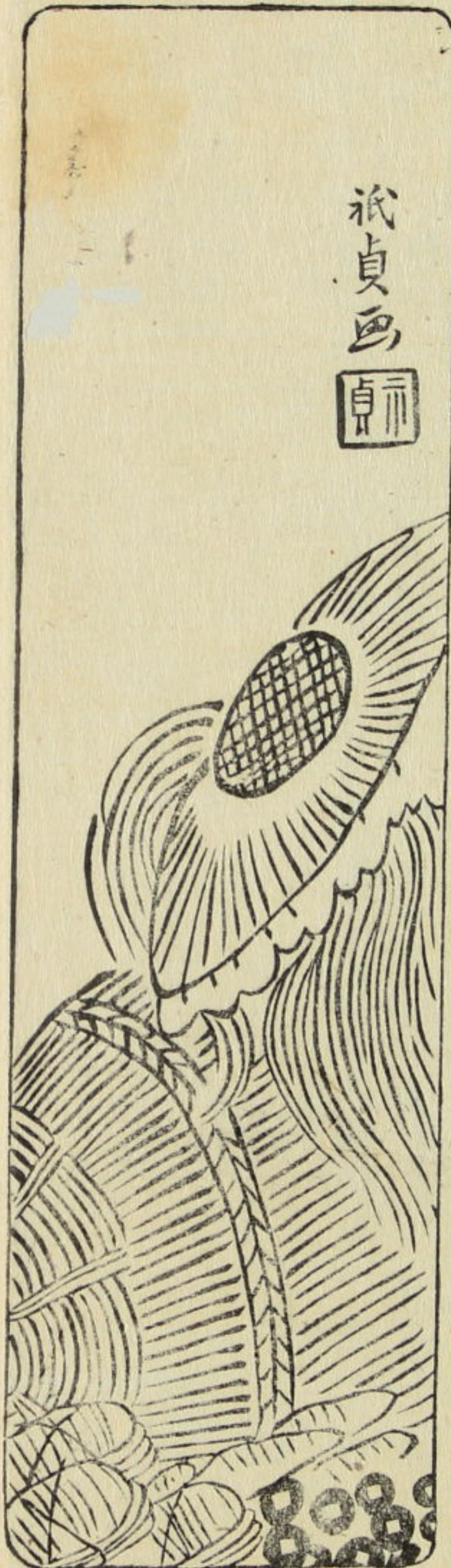
四隅、一白ふ庭中め梅

自在庵

東福寺の懺法よみを誘ひて

おろく

祇貞画



つくしと義

貴春を露の毛あろり寶こ乃

宗吟

源よ門乃七日正月

向意

梅一を椿ハハにれ田い

祇徳

のくしと義

三ツの朝いつきこを並れつと里

宗成

代りこしとあきを梅る福福

宗吟

儀一とあきせて出れ春るもや

祇徳

金

やまうきれ大吉小判あし其

向意

柏をきさむ介於乃盈

宗成

月日星月白河いも多帝く

祇徳



銀

まろり糸の大黒ゆり珠乃春  
銭乃夷をいよほ 恨もぢ  
面白よき若の義り 嗜りて

福來  
祇貞  
祇德

茶

幼穿や 打志まらまのき 吳遠依  
さてい三河を尾張系 采  
春風よ 山本里本乃芽と 亭々

來德  
祇貞  
祇德

錢

寛永の寶也 通し 君う春  
八百八町 百ちと 王啼  
揚し 糸いよぬ 沙解と 世り

完二  
祇貞  
祇德



玉

十分よみうくや 玉は春けしき  
門松の花 背戸松乃月  
嵐音り 柳の枝と 嘯きと

船歩  
祇德  
梵薩

榼

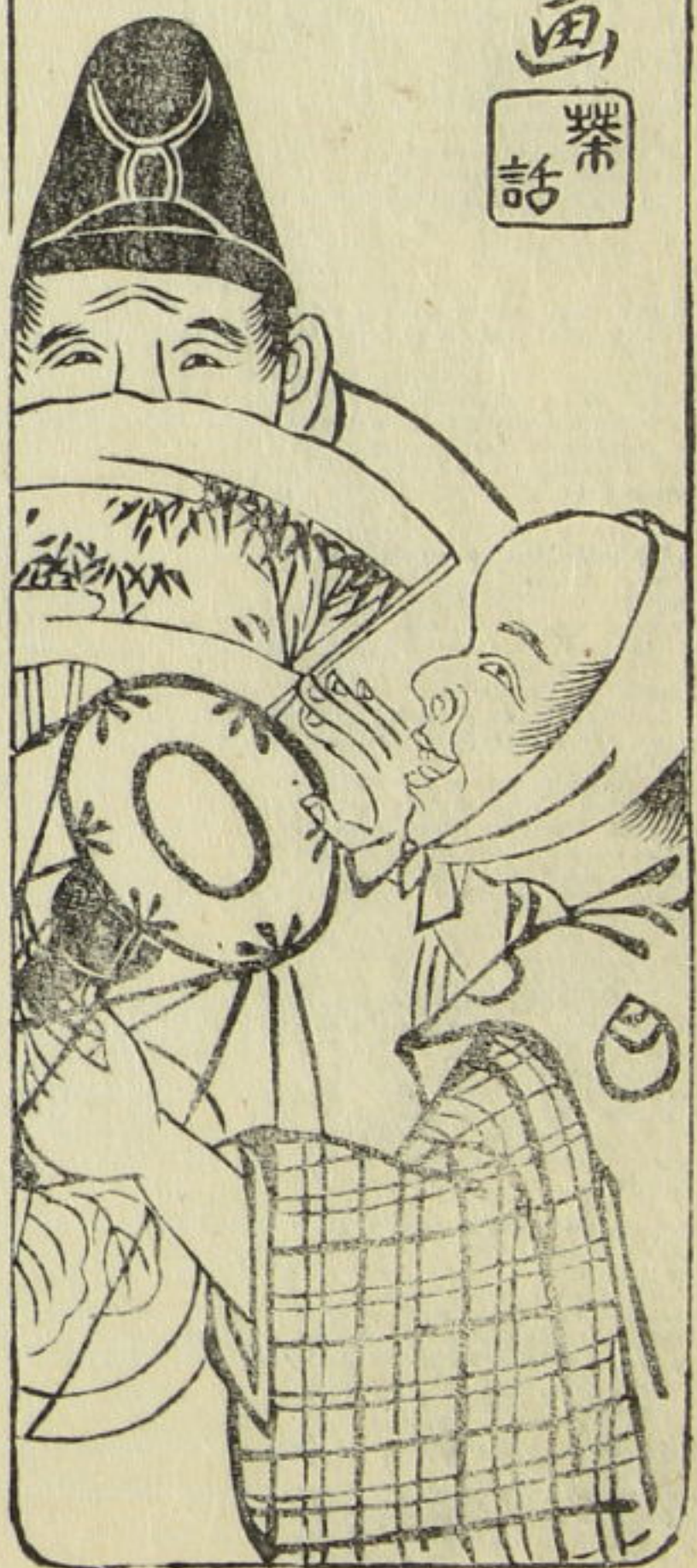
世の榼よ 打出の 淡や 子代村妻  
歌よみ多乃 三十一 去牽  
吸物よ 海苔よ 貝持乃 時めきと

祇南  
祇德  
卯雲



祇貞画 茶話

名所寄  
二の橋連



陸奥

いづ井の里

ゆり人のいづ井の里よまほひて  
こりよふとせをぬきなり

菊歳や里哉いづ井乃川ひらき

芳徳

萩かきうれ 元日乃鶴

祇徳

筑後

ちとせ川

君くしめ所もあらふ川  
いせきの浪乃後先くも

名城ゆる川もふ手持津代の妻

祇載

君も先くも水乃乳

曾隠

近江

もち井の宮

あきし物かちの宮よまほひて  
はくし物かちの宮よまほひて

みうらももる音くも乃妻

竹翠

清くも音くも乃妻

祇令

近江

む先くも山

まの目乃ひらきも山かちの宮  
まの目乃ひらきも山かちの宮

初見く梅系山乃白ひらき

祇完

初見く躍くも音乃声

祇章

大和

くひすの庵

こひすの庵よまほひて  
あきし物かちの宮よまほひて

よるも我はくひすの庵の妻

竹路

切くも我はくひすの庵の妻

素徳



大如  
わうくさ山 いまもむねもあやふしき山

我の色もさうま山や海のとらぬ 曾隠

手辰志くけく 鷲の飛又也 祇圓

祇の日は海 たつらるるの祇の日は海より海より

小松川子の日は海や若う千代 祇令

鶯の川もさうと 鶯い遊し真 祇載

こらうまの川の杜ニ城ありさうまの松の森をさへて

わう松乃春や砂子の初うす 祇章

雁啼 とらぬ一景れ春 竹翠

近江  
ちくの松糸 ちりあがりハチの松糸契りおく

一天よ松糸書 しあけれ真 自在庵

地々 糸物をさかぬ喰搦 祇貞

丹後  
よろ川よの濱 たふあなは君さよしの浜をわく

龜の子れ生 お代なり溪のま 素徳

鹿 れ中しからむ日のいろ 祇完

片 るれ郡 君りため命ふて我ハり

初空 や若うくく鶯乃郡まて 祇圓

國主 れ袖よ白よ梅りま 竹路



河内

はるかに先の池

八雲池のゆゑに池歩未助

ゆきのよのひの池や君う美

祇貞

駕籠と免れ伎き

天 芳徳

鶏旦 ハツめの也

ゆきの川や出仕れ人通

斗南

そ免子模りひらく色非

祇貞

水もも既し 鳴動こゑなりト

祇徳

改且 やの格字

ゆきのなうきんやと川日新

祇正

ふくさふりりと舞る手玉

祇學

花屋のよ白梅紅梅咲交て

祇徳

芳春 早ぬか

床忘しきく 舞ハ懲りぬ今朝の妻

眠竜

五文か分 刹利茂首陀も四方は雲

志景

音春 一や心切

云の雲の志く 金初くやかきり松

大楠

ゆわく 裾野子 傍く松かきり

孤堂

三春 やかせむ

菊咲 出る 氣色や 何方か美

御柳

月をもちり ちり 孕む 初日か

柳松

春 け 彩い さや 孝け たり 先せむ

祇童

正志 卦ノ格字

高き子のいしよ 産く 居る 初日か

風徳



枝多き人の琴より通るは門の松

葦暁

陽春 やの格字

魚ついでて志かも懐るや松と竹

儿文

葦やおろき之乃朝風

葦暁

くひすの餅摺り人の肩をさす

祇徳

九春 乃む早ぬ

初々たるまよひ今朝の春山

雅示丸

一花四よりひらき教ぬ福壽草

呆砂

光風 やり格字

年形やぬ織る庭は清きお

可中

小店よとて交へまを途て

半月庵

草の戸や二葉をぬて花の真

百芽

正朔 乃ひ字の格字

うれしきよ深らん筆の福壽草

暁古

子代をこころしく初霧の声

御風

けあさり下弦の及りぬま解して

祇徳

惠風 乃りの格字

初産む子乃岩戸にぬよりり

御風

鏡ひしししくしらくの妻

暁古

出た帆も入る帆もぬき日の指し

祇徳

王春 やり格字

大あまの船総ちさうや那の春

以徳

七喜ある光も深き初日の

おらん

年柳一まの川ぬりつくや山うつ

長秀



媚景

その格字

子室ハ七ツのね地忌々々先

五聲

儿状書クテ破摩らう的

漢眠

春もや寧科の節さ一耳して

祇徳

韶景

心の切活絶するホあり

吾ちうに五十三次も川鹿

漢眠

鈴とまめく竹馬う友

五聲

足袋ハ絆籠尾積らうらう

祇徳

解凍也 後のや現在の

あふりけき新やり 水のま

水羅

扇子く用くや梅れ初日款

祇章

山徳し海又浅し初日の出

馬才

鶏目

やの格字

新宅の折うらうらや粥うら

祇松

筆けうらうらうら編うら

儿丈

雀子ハ扇風の裏と鏡うら

祇貞

淑氣 かの格字

干菜今當り初き款 初日か

祇晁

桃の本よ何よ 秋茶鬱壘

葦暈

暖うも 冬はも真ハこま交て

祇徳

良時 現在の切

筑波根ハゆらうらうら 煮うら

仙呂

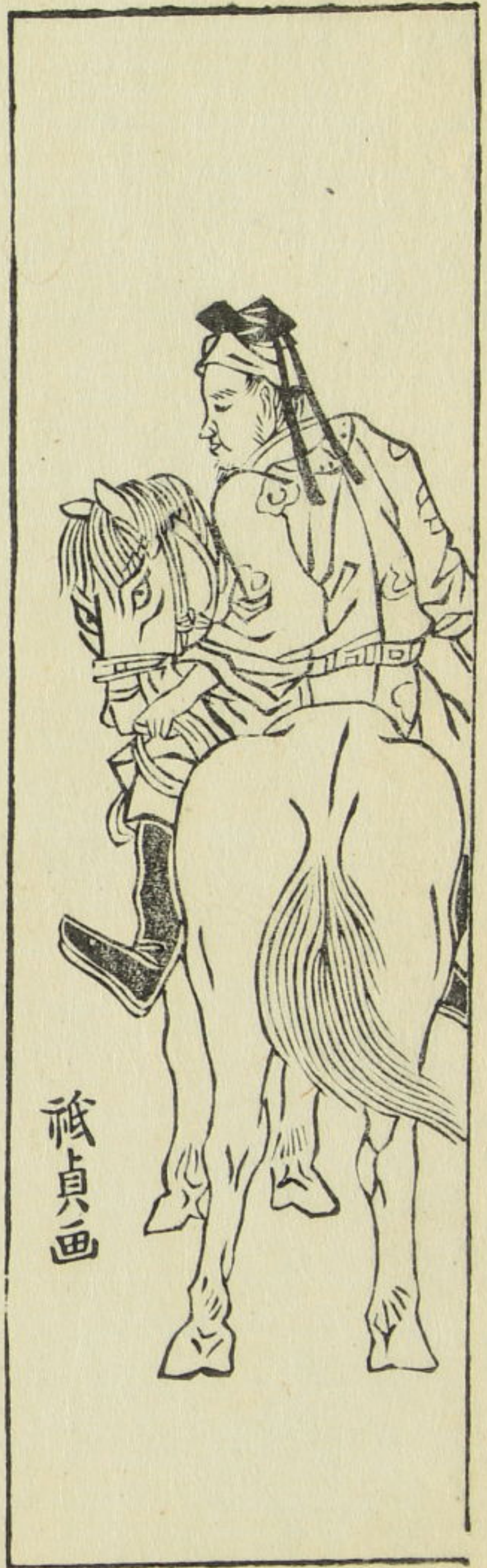
梅うらうら 我考ふれ 極メ所

琴水

その白ひうけう梅や岩のま

祇鳳





祇貞画

正目

春の川や千里の豹の一ッ歩より

祇堂

般乃二月と聞傳ふ其

祇徳

あざらかく甚盤の目より驚くよ

嵐宇

題 いつこ丸

梅柳のつぎ目のけりぬ乃去

君山

門礼の声もらかよ

祇堂

塵もかり東風や吹乃儿

祇徳

題 いくよ 右

その一機 芳野はくよ乃去

魚光

吸物腕乃白よ 永き目

素徳

白魚乃毎よ月のあそく水て

祇徳

切字の下よあよいきく

年一ッ 老てもうま一 今坊の妻

岷江

がー 湯とさすあらのあと

祇徳

やの悟字

世よ音くもく 欠や鶏乃口ひらき

桃鏡

おもひもよきぬ おうさるに炭

祇徳

心切

拍子よき 露の初声を月夜

祇卜



祝美よりりよ ねま窓の箸

祇徳

治定のし

年の矢は又あ〜〜する日の出は

梧栖

正月足袋のちきこころ能

祇徳



松竹も待とる風や 門は真  
賑やうり声は六ッや戌の年

稲波 祇鶴

迎陽

山廻る水音るー 今朝の春  
指折ー 幼子のりや ぬのり  
四方山は心望らくや 蕪村も歌

祇風 祇陳 祇糸

明り〜 初日の新や 福来子  
日光も抱〜 壺〜 玉乃集

祇水 祇庸



聖節

梅お〜 春の〜 や 我 宿る春

卯雲

廿陽

初喜や 帯足る人 花新〜 花  
風〜 光〜 玉の集  
〜 後〜

元珍 葎齊

十八の〜 鷹帽子何 松竹春  
雛れ声 六千里 ぬのり

竹磨 野翠



ひまの鶴の羽をのす初やきり

寫國

嘉節

門松や竹ハ和合はニタ

祇蓉  
祇毛

大皞

佛忍をうし先やさくも

湖北  
德阿

東君

初を辰ふり矢よりり

曉井  
嵐宇

勾芒

と初よりも七

真山

一葉洞

清らかなる鶴も混る  
年の芽も赤もあむ  
美やうきありの雛と伸あ  
あけく今初をうか  
橋よまゝハ橋又さ  
機音也伊勢路の初日

徳別  
祇達  
艸也  
荷山  
藤里  
此友

曆始

裏白は折も白  
初日初也  
初日初也  
蓮葉也初日  
惣傾ハ親

柳水  
桂子  
葵水  
芝蜂  
蓮花



四十四の春を白くして

をのつらうより志の花は初日か

百貫

仕合より乃馬ぬーの春

祇徳

追加

白あつめの花は祇徳  
連面の花は祇徳

明早やこころの春は春の園

祇蓮



祇貞画

梅之吟 琴基書画

揚南之も香はるる梅の世

百字

もく嘯くうるひの琴

祇徳

永き白子鏡二ある基を打て

祇卜

春興之部

御用人の春こそ春れ白桂

龍庵

一輪の花は桂ハ春る

眠竜

お明へ

叙ハ緒あり諸木の中は春柳

梢雨

雪の解も春は春一併さる

祇哲

松の雪も解くは春一春の春

祇立

春の解も春は春一春の春

祇文

お明へ

殿守れ春は春は春は春

竹裡

大糸の暗は春は春は春

子梁

世は春は春は春は春

字石



雛子啼く一輪のりき桂うら

徳雅

予師杉崎の稀も北堂のゆき  
くまのまへ今春におひとまり  
春年のくまのまへにさるる候

一年も延る程のしらの世

佛因

諸國除元之吟

去年の舞柳のさうたをよみし一集  
梓りして自在の発を御けて武徳  
の瑞の首達の白をよみし一集  
かゝる杖つき坂の熱ありて底床  
るゝ〜程を延る候をよみし

伎きま東也也屠蕪の酒を也

騎西隱士 得牛

除元之吟

武及八王子

友為也雛葵の〜人よ先 みる葉 竹逕

歌人ハ志〜〜苦りりあき葉 全

厭斗目先〜川林藤よ子〜初辰 相及厚木 尤流

多〜也喜也 賣堂よ年の市 全

除元之吟

信及上野方

年〜也人の氣よ咲花の妻 志水

瀬も〜也年け矢胡の摺らら 全

喰積也海老一さ〜れ三盡叟 李郭

月や日のり〜〜八年け大晦日 全

雪乃をほ〜〜ま〜〜ねの春 風谷

紅梅也師乞の巾よさるるらけ 全



自在庵の主人云一甲の林さくらに  
り掃のうへるまはまきり軒屋よまきり  
路ももろの真利よとてあつて先生  
の門よあまひけ地の風致よまきり  
ありとて湖山の二字と投画一掃よ  
もあまの友也りり

さんさん

信長上流方掉羽伎

とりわけて今朝おしるや初日山

湖山

遠き心と在くまら芽

祇徳

せふか

祇光坊

節季のや柏もよかふる少道

湖山

陸えう吟

湖山才

と下もゆこうかりりり律代の妻

友里

海夕やふへん年れ大井川

全

祇門よあまさんるを初よ

上諏訪

ふ入の門一恵むや初日新

淇川

光陰ハちや愈美の師を初

全

老年始口號

同

壽ハ松アこしとて初日新

生西

下女同士の化粧くも金や煤拂

同

今朝もよと初ハまきり今朝の妻

志桃

惜むらん亦九日乃と一の市

全

除えい吟

信別海津

ま柳の向やま並侍初日新

徳因

煤の目や小鳥の舞を掃て飛

文級辺

子伏等れ初初ハ子一馬矢破

竹紫



幾門のいさみと負ふや根松賣  
いろく山も今海を来む松の春 信長松代 竹紫  
よみ言と鞠屋も来言あるまきか 全 柳紫

歳旦 並 春真

葛籥舎代

舞 薨の羽風静よ酒乃春 東溟  
梅う香を死るれ東風の一手揃 全

春始

幡列

元日の席も指りり小殿原 子梁  
屠蘇のぬも川七雲の雲 祇徳  
つわよみの指も春乃色深て 竹堂

せしん

賣物や海の一野の山打巻 子梁

八将神分題

谷原連

歳徳神

母乃もや載きよらり若花を丸 祇勇  
波静かり致蓬萊乃海 稲軍

大歳成の方 むつら ホトキ

梅曆こちち向てや松たけ一矢 敲石  
言るるよまむ酒のほりしと 山岫

大羽軍牛打方 こし こし

三年れ稷熟よあり市代の真 稲軍



長 軍城 守方 湯小村 さまと

水古

大陰 申方 むくひく 産とせす

人の向方 産 むくひく 初日 柳

拍之

一 町も眉を 開く 喜 柳

ト之

歳 刑末の方 むくひく 嫁まうさ

依 保 娘 け 前 ぬ 方 け 一 敷 の ぬ

祇 周

ハ 三 垣 つ くら くら の 一 處

敲 石

歳 破 辰 乃 方 むくひく 一 せ ぬ

新 窓 け 隅 も 隈 な 一 玉 の 妻

山 岫

扇 子 の せ ぬ 弟 歳 の 札

祇 周

歳 殺 丑 の 方 むくひく ぬ くら さま

洗 子 耳 と 除 け や 牛 上 初 娘 葉

ト 之

え より 清 一 音 け 下 ち

祇 岱

黄 幡 成 の 方 むくひく くら くら さま

男 山 い さ 酒 汲 人 くら くら 先

水 古

は くら くら くら くら くら くら くら くら

拍 之

豹 尾 辰 の 方 むくひく 大 少 使 せん

雪 も 糞 心 せ ぬ 花 の 春

祇 岱

帚 目 ち き え 日 乃 庭

稻 里

守 歳

標 札 ハ 守 方 あり 年 の 宿

稻 里

か くの くら 流 くら 年 ぬ 仲 の 石

ト 之

婿 一 くら 紙 ぬ 子 色 む 年 暮 小

祇 岱

煉 拂 や 心 け 暮 と お の つ くら

祇 周



魚とハ糸雨の氣言を後ふたり  
雑巾の女浪男宿やすきとひ

水古  
拍之

全

賑いと雲井も又せん煤より

十才  
祇勇  
敲石

敗勢もま白てまより年の書

山岫

翁鷹ハもよ入ものを奉り飯

除え之吟

香よむりふ未もさし一高き梅

岩ツキ  
卍之

古也よ声ハよりぬ蛙うら

全

封目れ文字の居り也年の書

全

おぬー久

きのの行る人とはえん一今朝の具

釣瓶亭  
五井

雞汁の世ハ隠きこり梅のむ

全

山彦も回一洞を扱年々樵

全

元旦

物の名れもくーさやと朝の春

川越白陽舎  
祇孟

流よく向よ野老串横

祇徳

控らくと独活の匂いの独活よて

竹堂

さくせん

川越

ぬくも我毒もささるや三ツの朝

祇肖

流よく居るいさく串貝

祇徳

そらくと山葵の匂い山葵ーく

竹堂

せりか

文のふれと今よりくゆる原を弘

祇孟



つぎせしぬくもあら柳の家乃書

祇肖

廻文

なうき代りも用れ門の抄りて

川越

素谷

隣えり吟

川越

祇桑

門の回や露も初日を待りけ

全

市人の声や浪打と一の岸

硯露

ふよくひらくや梅のぬり真

全

年の瀬も苦もかゝ紙や三の思

免考

幼り糸うけて用くや里ん梅

全

曰

さねの年入踏場も富士と白の  
こ川日新しやしき甲斐の根

富士とらんく海とも思ふ初日か

甲斐

字石

巨も年唐もみまにそく宿

祇徳

かたき運も初海苔の石はさる

梵薩

ここのみ、踏場の富士嶺と海の  
こと、ま、甲斐

富士の書尺ありぬ年の石はか

字石

甲陽の影をてて

甲斐

壽や幸富士れも川口新

祇蘭

おほ乃りしをゆり年の垣

全

改まぬ喜やとち繁れ始り那

祇嶺

手の願や静よ風乃わらるる

全  
女系、津、実、因、房

欲もまじひしつ積るや世安の妻

冠柳

根く掃く自在の煤もせらる並

全



歳旦

小山連

雞の音やおとるも一先袂のま  
みは射と免せむ天の鹿兒弓  
竹垣もまきま芝野乃あやき

千林  
祇徳  
祇竹

其二

え日よ益くらのひれ初言う  
湯殿とく先れは<sup>突</sup>ひらく戸  
五位六位わゆる枝よ東風吹く

惟徳  
祇徳  
祇國

其三

一輪の用くやあはれ福来草  
先ッ一者さくふ田つくり  
駒多れ約引くくま風情ま

祇十  
祇徳  
古笠

活玉一世の新なりニッの節  
富士よりや山くよりそぬのま

祇竹  
古笠

せふか

もどおろく筈い逢くり年の市  
一とせ枝振りつりり言う坂  
一の夜や身梅ま秋窓の樹  
昔季ゆや日向とくる年の市  
中くくかつぬ波や海の岸

千林  
惟徳  
祇十  
祇竹  
古笠

韶節

年まや老をむらるるあの日  
太一箸 太ッ 雑 糞 雑タリ  
嘗て菜とくくま筈よ入らまて

祇國  
祇徳  
惟徳



音旦

搦系連

一巻れひらきさく免必初奇の真  
精をさくく厭る積りち  
天の運開きさくむるやと初の志  
けられ戸乃塵新くさ初日か  
初るや咲く又さく梅のむ  
え日やますく白きさく白髪

掌仙  
井徳  
邦秀  
春色  
習  
徳爾

歳終

眩枕樂くく源くく年のくれ  
春を待んまもくく一扱  
夜の坂あつく嬉くく年のけき  
夕さきさく計の目くく年の書

掌仙  
井徳  
邦秀  
春色

来るまはけ振きよせり年の音  
浦山や越くく年のかき  
より新事もあつくく咲く果書る  
さくくくくもさくや年のけき  
老の波はうつめ年のけき

童  
かり  
徳示  
喜助  
民泉  
祇國

除えく吟

履端

川越連

え日やあけ魚代らぬ松の声  
みづけく玉の真くやさく盛

水徳  
祇仲

憶立産業

同

初年や先又く先く初曆  
ふ代あつやうくぬ究の川勝

尾海  
至江



歳季

世の世活の樹もさしあはく事らまぬ  
集まらる寝や苗人としり同  
高きまよ我と新屋を取よりり

水徳  
祇仲  
尾海

歳首

伊代まよし四百余別れ店卸  
苗圃や 家のあしき母乃咲

素雞  
里扇

我も神者の終よ入く

みせまよやのまらから連く出まよ  
伊代まよしや宇宙は満る玉乃春  
船形まよく 東岳の川や玉のま

文花  
秋屋  
幸屋

書集

ん休也又まよしととねの市  
傾城乃尾屋を足くや大海日  
十ふし腰の以坂乃師を小  
商人まよ物好 又も師を小  
献立れおや賞ひりり年の市  
除け一扱待り子新や 福妻ま  
除く家も灯や 幸了扱  
年の尾や 夢の上れ 大漆

遊車  
鹽車  
幸屋  
紫石  
志候  
至江  
芦風  
煉屋

歳且並歳暮

古河静樂亭主人

福妻皆如意急満乃 玉の真  
心や たり扇れ 善め

蘭風  
全



歳旦

佐倉

省くも我くもと伊代の春

君養

拾芥抄乃も草十二経

祇徳

棚鹿水金の隅よ窓あけて

祇貞

全

同

又是より日よ新々初自水

獅巖

福寿草よ祿備へや之ッの春

桐枝

あふもや本れ移り香も新々也

之風

元旦

同

艸紅の兄や初日よ福壽草

祇辨

屠蘇先ッ祿よ款の愛敬

獅巖

常よ足取留まり今年ハあふもて

君養

せむか

潜りぬ身ハ楽しおと年のられ

君養

大くも也序右れ銘らるら

獅巖

よるも年も忘るし時也大みそ

祇辨

梅よりし家先うけん年も愛

桐枝

屠蘇ハ并よさるの一夜也年終

之風

初老を笑し

佐倉

半初也老しよ字のわけるま

蕨采

りよ也樂する人カ淋し

全

除えん

泉別

名をかつく風もするや也那の真

嵐竹

を貞福のさうもあふまやと一の書

全



除元之吟

因省

深出々也柳八みより花の来  
 是うらハ日とさく廣也明の去  
 下門の解系りたる也初みより  
 関の戸をひらく音あり初日の出  
 大海老よるまの松乃剛深小  
 徳よ入門の之部也那のそ取  
 葉より行舟の車也初曆  
 炭取の飄り今彩也玉の真  
 世事一是貴人  
 破道目を経ひは舞也いふれ  
 潔一之文於葉書れ人通

横塚

艸叟  
 芳隆  
 素兄  
 德雨  
 祇一  
 雨人  
 祇陽  
 德鵝  
 素兄  
 芳隆  
 艸叟

棧場より道は舞りり屠蘇袋  
 赤より於浪のすくくや車のおれ  
 梅の香枝をよるや舟の昔  
 世よりりの浪も静也大海日  
 取中若く合点ごす也大海日

武員

初日より下也心乃むむり  
 身ハ一ハ氣配り多き師走か  
 兼の字よ叶ハ福あり勝葉果  
 那白ありとつとさる道小満日  
 春心より元のすくく

大屋邑

竹延  
 全  
 祇室  
 全  
 筑紫  
 雲子



元旦

相州下溝室壽堂

歳の春何うも咲む袖奇草  
初春乃巻り歯固の海法  
歳らむ宿の夢も吾居しそ  
樹徳  
祇徳  
一簑

除元之吟

目所

杉風を枝よと免くも鞠か  
於く水も母の筈を感言ぬ  
全  
祇麓

さへん

下溝

待ゆより歳末の卯一花の春  
ふうく先一用きぬ 歳終集  
杉井の豊し 初日くま  
只一敷 蒼くくくく 世のま  
一簑  
猿鳴  
月江  
素川  
新戸  
艸玉

猿島

かきりそ糸のくくく玉の去りく那  
けりや月日の飾のやすくそ  
全  
丈水

除元之吟

八王子

あまもや老も隔てぬ人障り  
好もりの酒を止まらるそ  
全  
雷女

急いせせぬくくく年ハ昔より  
嬉しさを死 初もや 杉傍  
全  
吾別

風流の路中も野より 蝶くくく  
えりや翠も目も夜 杉乃風  
全  
竜運

除元之吟

年一 扱 舞もくくく 世も昔より  
鏡より 心もくくく 花乃集  
全  
半林



かつぎの段もとうる年の園 半林

全

大ふくまの皺のまじりり毒法師 随竹

古学庵主

まゝまよりの隙とすや竹乃房 全

府中

まのまのや杉似やまき霧の声 魚腮

とりの隙を越えまき霧の笑ひか 全

除元之吟

豆刈肥田

又ふかしのまの影らや今影のま 祇王

働らまのよふ枝やまの楸 全

除元之吟

上品高崎

其まよりのまの影らや今影のま 其磨

杉もゆりのまの影らやまの影 全

追加

花聾の窓用よまのまの影ら 得牛

騎西

まのまのまの影らやまの影ら 全

門松乃縁りやまの影ら 祇棠

親まの影らやまの影らやまの影ら 全

鳩ヶ谷

門松乃戦キやまの影ら 其舟

一日計者在雞鳴

古河南草舎

いとせの笑ひまの影らや雜煮時 故由夫

越て見む今まの影ら 全

幡刈姫路

初まの影らやまの影ら 祇應

三



追加春興

白魚と僧も茶盤と云れり

來雪

池の雨よこへる蛙小

玉貫

全

水知よんよ敷もなりりり

稻里

霜磨の痒も陸れ落度

敲石

歳暮之吟

連秋月の

五麗子

すもも

きつぽく

江戸代



年忘連

圓十

わすれぬ

忘れぬりよ

りり

梅を生て

芳徳

の一夜を

ゆささや



朝の書よ月あり影や師を猫

寥和

便し〜〜の吟を

こよみかみ撰者の寸志なり

けいものこころもさや岩のる

烏邦



五十年 泚浩とてとて運ぬ

空翠

全

さりまう〜渡〜舟まの師をい  
白〜川 煙や餅のた〜り

團齊  
範路

全

人ハ心さ〜も〜よ〜奉の言  
果報ハ床〜待や物らさ大命月  
手去産〜也ま〜と枕〜手〜の市  
候 搦や家お〜庭 乃 鏡山

六窓  
雪丸  
竹賀  
竹魚

全

ト戸道ハ右リ 花り〜と〜忘運

晋阿

か〜〜一〜と〜せ〜り〜ぬ〜杖〜を  
翌ハ又 存勢の候 萩奉一 扱

尹督  
雪齋

全

〜さ〜〜門 松賣のま〜おひか  
獅子も 尾を 股子 扱むや 大晦日  
世の中よ 朽ら〜と 一も 衣配り

暁古  
御風  
漢賦

曙 運た 自立の 齡と 壽〜

待り〜り 北斗の 氣〜 奉書〜

竹塙館

全

宵か〜〜き 師をの 人乃 笑顔か  
挑灯ハ 日中 晴也 大晦日  
〜 魚を 吹よひ〜る 言和 布刈か

拾葉  
野翠  
寫國



全

さきさきくりに去依見記や舞う  
我病の傍よりとまを  
人の世くらまきく師老の月夜か

百庵  
風塵  
棠揚

全

あさきさかしくなしく暦の古ひる  
けふもれ一歩もく連一樹こも  
喜むきとら生酔や大晴日  
けふや染もむむとら梅の宿  
振向もせとくき年け味か

柳水  
都橋  
尖麗  
有志  
雨鳥

全

正月の役者つけえの夜の市

百宇

除臘

年の序とんせりと人せせけらま

斗南

いつる心か  
いづる心か

鏡よも偽んせよとくの昔

御柳

急景

とーつきまじせよとけけらなう  
まよのまよふ様を乃紋つと

貞風  
園二

窮紀

曙へ肌のまぬかりとくの昔  
まよまよのゆらうまよの豊かり

以徳  
おらん

老母や遠く  
やりぬるを

考松乃あそひるの市

長秀



道水くも吾行ふあり年の煤  
あゝ酒一真一ハ迎き年のくら  
市もや何賞まとも年くくよ

歳晏

眠竜  
志景  
音好

白杵も湯よあゝすま師をうら

桃鏡

桃鏡 予の 吾を 尋る 日

あゝ酒也是も吾乃ゆるり

祇徳

日向をさゝし霜月乃蠅

桃鏡

能キ家と人の長び栖もく

卯雲

除日

勅してねくの酒よ自うれぬ  
い戸中を年房くく年如書

山猿  
田耕

全

川年も却くを一也りから  
塩かりよ押一つ先りり赤鱗

旧室  
蒼狐

去秋を去くぬ虫あり年の書

賢沖

全

天元の市は勢ひやよろんぬ  
年波も何苦言なり一蜜の款  
縹也い年の花もや糸車

曉翁  
北支  
覚捕

歳暮

残梅の目かゝるくもや年の奥  
歩佛れきしきくも師毛か

風土庵  
長隠  
金竜山下  
白雨坊



守歳

ささるゝまきかゝりて人のこゝろ  
御しゝぬ人も浮世の師をい  
よしゝと今もはらぬ庭の栂

卯雲  
祇軟  
官枝

全

もさるゝまきかゝりて人のこゝろ  
おろしゝまきかゝりて人のこゝろ  
よしゝ巻の館も屋敷の歳言か  
年の栂も同じくまきかゝりて  
門松の根つゝまきかゝりて  
よのまきかゝりてまきかゝりて  
世よほく越ゝぬ人ありて年の栂

祇載  
竹翠  
祇完  
竹踏  
曾隠  
祇令  
祇章

全

白梅や代はゆゝ年の内なる  
よしゝと今もはらぬ庭の栂  
世ハ師をいゝまきかゝりて

千石  
官枝  
五声

全

おろしゝまきかゝりて人のこゝろ  
り人のこゝろまきかゝりて

卍也  
祇仙

全

正月まきかゝりて人のこゝろ

文郎

左右之吟

おろしゝまきかゝりて人のこゝろ  
馴くよまきかゝりて人のこゝろ

梵薩  
佛因



煤掃や 一日れ 葉門

波道

我宿の煤の日とさくらよあうね  
好癖の池邊よつらなりは  
父母の望固より始すなりと  
あまうて予ハ世のやと  
父のたよりさうんて和漢の  
和

ふ益志く師を志くすよ年暮ぬ

祇尹

季冬

あるまをよ 予字はあう進年ら進ぬ  
縹色のみよいよやき一年の進  
年と進たる古のうらよと  
年の序やふの海日もおと進る

祇朴 此友 藤里 荷山

四極

煤たるまやまの手傳よ山かつ  
一二輪ま傳梅乃矢散う那

祇蓮 葎脣

全

大首の一板ハ皺乃のひち  
塵子深んるも一や煤たるひ

平澤 隨貞 祇獨



一の飲く予よは足進り年の音  
酒厚一年の名給乃一ト 葵  
よふるの日の都まや幸れ人  
長年よまよと支度やぬ 新少

露紅 祇因 雪牛 祇門



殷正

咲く川の枝ありて年の便りか

涼葉

節季の阿の里のまゝなる柏子か

祇文

明日の京丈悔いとありよりり

祇哲

り年れ園ちハ誰う 鐘の声

祇立

抄冬

千羽鶴居るよあは日や年の昔

宗古

花も一免花の納免やと一の梅

百芽

濱美や二とくさうぬと一の市

儿上

よんちよつちみく徳や年の梅

松翁

全

老くく人あふひなり年の昏

嵐宇

梅うあやとくく送る年の風

曉井

梅う香よまを眠くや一の窓

徳刃

年の園 遠け 駒よ居る梅

孤堂

大呂

目もさやふゆもそあすよ大晦日

梢雨

来るまれ人質あり梅のま

麦斗

残冬

降くくも叢笠賣人冬の市

祇莊

帰くきや嵐やとく窓け外

大楯

市店催春

人足も流石よまれ隣り

尤竹

早



歳末

あつさ一回し調子よき  
今夕れす半ハ忘遊ハ忘れ  
行年やひりし暮西舟舳の飾

抄冬

初うせははまよハ来まハを煉拂  
しし川の流ぬくくし  
習とくハよのさらしき一冬の苦

祝退隱

君は祿讓執一字やし  
分別のうりしぬる色や年のくれ  
梅白しきしき中け年近い

祇元

祇道

得二

居燕

君山

魚光

琴水

水羅

祇章

抄冬

兼ぬうう勢も馳まし  
民の戸も賑ふ候や  
返電

祇正

仙呂

主眞

候眷乃喜や師をれ郭乙  
車舟の音や文行大海日

徳雅

祇達

上天

浅きやあし人限る年の市  
行年故巻く初免りり古曆

湖北

徳阿

律檀

髪ゆきく人乃師をハ見  
師をまき鬼よ角よ人の立居ハ

水光

徳丸



花よ〜〜咲せて見せん昔の庭

徳和

全

万歳の日水よ昔の師を  
もち花もよりの奥は白ひうら  
花よ酒氣昔使れ笑顔可南  
年のけり〜〜るさ〜〜也大晦日

不徳  
水郷  
祇芳  
竹如

元英

春一子の庭くや年れ一扱松  
園の戸をぬきとも真也〜〜菟  
野を解る水も年れ入に子  
松舟れ〜〜よきもゆ〜〜子の園

祇風  
祇陳  
祇永  
祇水

殷正

引もせぬ池さくられ〜〜書ぬ  
野を花よぬよやま年福書  
傾城乃衛士う焚火也除夜の庭  
師も水書照〜〜門乃人通り

珪外  
野永  
雅永  
采砂

弟月

満る夜や〜〜や〜〜声れ扇子賣  
年の園六十一〜〜足も端〜〜みぬ  
又今年人〜〜下〜〜書〜〜りり  
昔〜〜書〜〜代乃〜〜山乃  
年の庭よ我尾取〜〜

祇蓉  
祇毛  
葦晴  
儿文  
祇晁

お明〜〜久

年の庭や千〜〜書〜〜下〜〜

百貫



童子淺淵向く也年の川  
おしとて師を女と町乃事

梧栖 箱波

守歳

志のりふして相志のり年のは  
しとくよあろうかみ也年の楸  
枝さく門乃成る也宿れ写  
八十氏の吉支造る也固見山  
世の人れ業也年れ亦洗ひ

立德 水室 冬扇 余月 信夕

顥頊

一日れ思乃くもはよ小晦日  
子寢と人よえせと也衣らと  
賞ゆと地福居一也年毫

宗成 宗吟 來徳

旅りいハ年の納乃ふええり  
福内乃考つさきよ一年の宿

完二 福來

采室よろ

一とせと工夫して見よ十二棒

向意

大呂

佐保姫とす川おや年れ鏡の間

舩歩

春待月

堪忍のとしまる年也か一宛  
此年にも夏のつちも地書きりり  
扱ハ九ツ年れ別進乃撞つきぬ  
我も今もあつらふとて年と違ぬ  
昔とて年の尻振とて父鴨

竹堂 素徳 祇圓 祇庸 百梅



かつとくしるまの一字のいささぬかり

祇負

大尾

面六句

光俊の録

おひよせて竹隠者

け年も自在なほして自らぬ

祇徳

終よそへぬあしつる冬

水光

かかき餅とさきの声もて

呂隠

ごころいと句をす(なと音

梵薩

樹くの月塚く遠入掃除口

涼葉

小萩きくら萩むらさきの萩

居燕

彫二西村新助

追か

予わつてりとき

通義師の御金言をせぬとき

了事とおろくおといひけり

相直の階勢よあまの老好

のこれとかな

詩いやく歌のよきまひたり春

無徳

自在先生の門子入て

くのりしるふ徳を入門かたり

祇山

みまをふく小常ら玉り喜

如暁

何と笑ふつるやとりのい

詠亨

石春帖里二月出梓 心志林のまは



